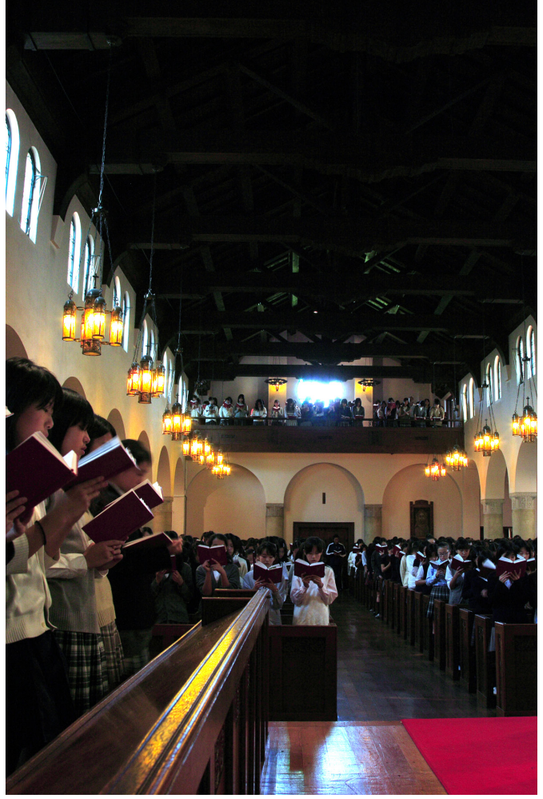


建学の精神

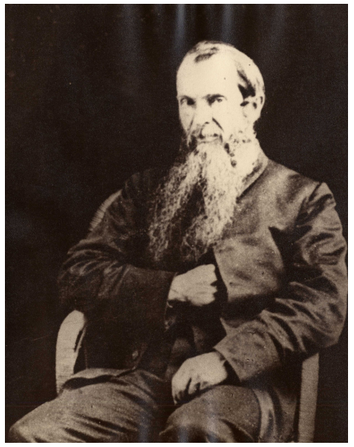
「道を傳えて　己を傳えず」は、立教女学院の根幹を表わす指標です。日本の聖公会信徒がアメリカ聖公会から派遣された宣教師C・M・ウィリアムズの生涯を評した言葉が、「道を傳えて 己を傳えず」であります。ウィリアムズこそ立教女学院の創立者であります。今を遡ること 151 年前の 1859 年(安政 6)6 月、上海から米艦にて長崎に入港し、広徳院にて生活を始めたウィリアムズは、日本語や日本の勉強の傍ら、幕府の役人や武士、医師、僧侶などに英語を教え、世界情勢を語っていました。その中には、早稲田大学の創立者 大隈重信や日本の郵便制度を創設した前島密などもいました。ウィリアムズは、50 歳になったとき、自分に関する日記、手紙、記録などの書類はみな焼却するように書き残しています。それは自分の業績を何も残さないという確固たる信念に基づくものです。立教女学院のスピリットは、まさにウィリアムズの生涯と同じ道であります。これからの時代を見据えて立教女学院で学ぶ者、教える者が、「道を傳えて 己を傳えず」を単なる標語とするのではなく、自らの指針として歩んでいかねばならないのです。大変重いことであります。

立教女学院　校章・マーク
1947 年の学制改革に伴ない、改正されました。当時小学校に在職していた矢崎、日名子、長谷川などによってデザインされ、途中、大きさが改められました。小学校は赤、中学校は空色（のちに緑）、高等学校は紺色、短大は濃紺（のちに紫。略式のみ濃紺）。

学校法人 立教女学院
〒168-8616　東京都杉並区久我山4-29-60
TEL：03-3334-5105　FAX：03-3334-8393

創立

立教女学院は、1877 年(明治 10)、ウィリアムズによって創立されました。神田明神下にあった宣教師ブランシェ夫妻の仮住居で始められた生徒わずか 5 名の私塾として出発しました。初代校長はブランシェが務め、来日したばかりの宣教師ミス・ピットマンがその働きを支えました。ミス・ピットマンはのちに立教学院の校長ガーディナーと結婚。1882 年 (明治 15) ミセス・ブランシェが帰国してからは、校長の責任を引き継ぎました。ピットマンがその責務を果たした 7 年間に、生徒数は少しずつ増えて 20 名ほどになっていたといわれています。1884 年 (明治 17) 築地居留地内の 26 番に、建築家でもあったガーディナーの設計で念願の新校舎を建てることがかないました。その校舎は洋風三階建ての瀟洒なもので居留地でも評判の建物であったといわれています。



創立者　Channing Moore Williams（1827～1910年）
「道を傳えて 己を傳えず」の言葉どおり、
清貧の中ですべてを捧げた一生を送りました。

創立の背景と歴史

神田明神下のブランシェ夫妻の住まいで始まった立教女学校は、その後、駿河台紅梅町、京橋南小田原町を経て、築地居留地へと移りました。1884 年 (明治 17) に築地居留地に洋風の新校舎が建てられるまでになりました。そして、校名も〈立教女学校〉と定まり、生徒数も 500 余名と発展しました。一粒のからし種にも比すべき小さな私塾は、東京でも有数の女子教育の教育機関となったのです。

ところが、1923 年(大正 12)の関東大震災で立教女学校の校舎が全壊してしまったのです。開校以来の未曾有の窮地、閉校の危機でした。そのとき、当時の責任者マキム主教は、「すべては失われた。神にある信仰のほかは」とアメリカ聖公会に打電しました。マキム主教の呼びかけは、アメリカ聖公会の婦人信徒の心を動かし、のちに学校存亡の危機を乗り越える大きな支えとなりました。しかし、校舎倒壊後の学院再開は極めて困難な状況です。この危機も、かつて教頭であった石井亮一の協力によって克服することができました。石井亮一は、日本最初の知的障がい児施設〈滝乃川学園〉を設立していましたが、その校舎の一部を借用して学院再興の時を待ったのです。

学院の祈りに応えるかのように大震災の翌年、1924 年（大正 13）アメリカ聖公会婦人会から巨額の支援金が寄せられました。こうして、現在の杉並区久我山の地に悲願の校舎が建てられ、学院が再興されました。現在の高等学校校舎は、1930 年(昭和 5)に建てられ、学院の象徴ともいうべき聖マーガレット礼拝堂が 1932 年 (昭和 7)に献堂されました。

60 歳になったウィリアムズは、1889 年 (明治 22) 日本聖公会の第 2 回総会を終えると主教職の辞任を申し出て、後任にはマキム主教が選出されました。新任主教の邪魔にならないようにと一時帰国したウィリアムズは、再来日したときに「ここに一頭の老牛あり。どうかこの牛を主の御用にお遣わしたまえ」とマキム主教に手紙を送り、京都を中心に伝道活動を続けました。身体が弱ってからは、迷惑をかけたくないという思いから、50 年にわたる日本での働きを終えて、わずかな人にしか知らせずに日本を去っています。ウィリアムズの墓碑に刻まれた「日本在住 50 年、道を傳えて 己を傳えず」という言葉は、ウィリアムズの人生を端的に物語るものといえるでしょう。

その後、立教女学院は、1931 年(昭和 6)には初等教育の必要性から小学校が開設され、さらに 1947 年 (昭和 22) には新しい学制により〈学校法人立教女学院〉となり、高等女学校が中学校と高等学校に分かれました。また、1967 年(昭和 42)には女子短期大学が開学し、ついで 1970 年 (昭和 45) 女子短期大学幼児教育学科の開設に伴い同年 10 月付属愛児研究所天使園が開園され、2002 年 (平成 14) に幼児教育研究所天使園と名称を変更し、2008 年(平成 20)に認可を受け女子短期大学付属幼稚園天使園となり現在に至っています。高等女学校の時代 44 年間を経て関東大震災後、新天地、杉並区久我山の地にて 80 有余年。幼稚園、小学校、中学校・高等学校、女子短期大学を擁し、2400 名が学ぶ学園となり、今年度は 134 周年を迎えようとしています。